
*Non-daily life

久夾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

*Non-daily life

【Nコード】

N8359B

【作者名】

久夾

【あらすじ】

興味本位で、男装をして全寮制の聖琳学園に入った香月唯（k a d u k i y u i）そして、何故か強制で生徒会に入る事に！？男女共学の学校なのに、生徒会に入る事が出来るのは男だけ！？男の子として、通っているはずなのに、他の男の子達にアプローチされてしまう毎日。生徒会の面倒な仕事は、全て回ってきちゃう可愛そうな香月唯ちゃんのお話です。

1・此処の学校に通う…！

此処は聖琳学園高等部。全寮制の学校だ。

寮の規則はほぼ皆無に等しく、節電・節水、無駄なモノは使わない。というのが唯一の規則。

寮の部屋に置くものは、全て自由でテレビやパソコン、ゲームを置いても構わない。

更に、起床・就寝時間は自由。

教師曰く、授業に出ればOK。

そんな誰もが憧れる聖琳学園に男装をして、入学する香月 唯（k a d u k i y u i）。

成績はソコソコで、容姿は上の中くらい。

成績がソコソコだからと言って、運動神経が言い訳でも無い。

「あ、お母さん。あたし、聖琳学園に合格したから、そこに行く事にする。」

聖琳学園からの合格通知を見て、言った。

お母さんは、手に持っていたお皿を落としそうにした。

そんなに、驚かれたら傷付くよ。

「合格通知が来たのね！

でも、聖琳学園は全寮制なのよね…。

レベルが高い学校だから、仕方がないのかしら…。

そういえば、聖琳学園は唯が性別を男として偽った学校よね。

男の子として、そこに通うの？」

お母さんが、あたしの事を心配して長々と話す。

お母さんが言うように、あたしは性別を偽って面接を受けた。

本当に男として見られたかどうかは分からないケド、面接に受かり、しかもその先の筆記

試験にもギリギリで受かった。

「うん、そうだよ。大丈夫だって。」

聖琳に通う為に髪まで切ったんだから。」

あたしは、聖琳の面接を受ける為に幼い頃から伸ばしていた髪の毛を切った。

「という事で、明日から行ってくるね。」

今からは、明日の準備、とあたしはお母さんに告げると部屋に戻った。

聖琳学園の高等部の入学式の5日前に新1年生達が初めて寮に入る日で、寮の部屋割りを発表する日。

新1年生達が、重たい荷物を両手に抱えて、次々にエントランスの中へと入って行く。

ほとんどが、男子生徒だ。

此処、聖琳学園高等部は男子八割女子二割の学校。

女子は逆ハル気分を味わえる。

逆ハル気分を味わうのではなく、自由な寮生活を楽しむにする女子生徒の方が少ない。

あたしも、皆と同じように重たい荷物を抱えて寮のエントランスに行く。

「ハイハイ、これで皆揃った…かな？」

パンパンと手を叩く音がしてから、声が聞こえた。

「ええと、私は此処の寮の管理人の矢吹 空瑠。

ほとんど、何もしてないけど、わからない事があつたら聞いてね。

」

面倒くさがりやな女性だな…。

あたしが、そんな事を思っていると管理人室に戻ろうとした矢吹空瑠は

「あ、此処に、部屋割りの表があそこに貼ってあるから、ちゃんと見てね。

男子が、左側。女子が、右側。」

あそこ、と言って沢山貼り紙がしてある所を見た。

今、此処にいるのは多くて80人。

一遍に、同じ所に行けば、すぐ見れるのも見れなくなる。

あたしは、貼り紙から離れてまた、入り口に行った。

ドカッ。

入り口に行こうと、身体を半回転させた時に人にぶつかった。

「すつ、すいませんっ。」

あたしは、咄嗟に言った。いや、言わざる得ないだろう。もしかしたら、先輩になる人かもしれないから…。

普通に見たら、顔が見えない。顔を上に上げると、やっと顔が見えるくらいの身長だった。

…っ、カッコイイ…かも。

あたしの身長は、162cm。女子では平均的だけど、今は男子として来てるから、小さい。

「もしかして、唯ちゃん…?」

知らない人に、名前を呼ばれた。

2・ルームメイト+a

「もしかして、唯ちゃん…？」
知らない人に、名前を呼ばれた。

此处で、あたしの事を女の子のように呼ぶ人間は居ないはずだ。
勿論、今此处で下手に喋れば性別の事がバレる。

「イキナリ、ごめんね。俺、櫻木 壱夜。貼り紙見なかった？」

今日から、君と俺が相部屋みたいだよ。

どうやら、新1年生と2年生が奇数みたいで、俺と君が同じ部屋になったみたい。

まあ、これから、ルームメイトとしてよろしくね。」

櫻木 壱夜先輩が、手を差し伸べてきたから、仕方が無く手をやる。

「香月 唯です。よろしくお願いします。

聞きたい事があるのですが、何故わかったのですか…？」

これは、普通、聞くだらう。聞かない方が可笑しい。

イキナリ、自分の名前を呼ばれたのだから。

「あ、空瑠ちゃんが教えてくれたんだ。

小さくて、可愛くて、光りの加減によると髪が赤っぽく見える子、
って言われたんだ。」

空瑠ちゃん、というのはさっき居た管理人さんの事…かな。

…にしても、小さくて、可愛いは余計だよっ。

「そう…ですか。」

「あ、ごめんね。男の子なのに、可愛いつて言っちゃって…」

全然、申し訳なさそうな感じがしないんですけど。

男の子…に見えるかな。

「じゃあさ、部屋に行こうか。」

壱夜先輩に、手を引っ張られエレベーターの中へと連れ込まれる。

エレベーターなんて、あつたんだ。

そういえば、此処に入る時に何階建てか見て無いな。

エレベーターの中に入ると、壱夜先輩は6階のボタンを押した。

エレベーターのボタンを見ると、どうやら6階まであるそうだ。

「君と俺の所は、6階だから覚えてね。」

チーン

という独特な音がして、6階で止まった。

エレベーターを出て、右側に行つて突き当たりを左に行つた所で、

壱夜先輩が振り返った。

「覚えてとか無いと、迷子になるよ。」

今までの道を思い出す。大した道のりでは無いのだが、何処も同じ造りでややこしい。

エレベーターから出て、右、真っ直ぐ、突き当たりを左、そして突

き当たりから4つめの所で壱夜先輩が止まった。

「此処。どうぞ。」

と、壱夜先輩が扉を開けた。

中は、広く30畳くらいあって、テレビとパソコン、ソファが目立っていた。

その部屋、30畳だけでなく、他に扉が2つがあった。どうやら、そこは寝室になっていて6畳ずつあるらしい。

「初めに言っとくね。俺は、2年で生徒会長をやっている。此処の6階は生徒会の人間しか入る事が出来ないけど、此処の俺の部屋を今年から、君も使うようになった。という事で、君にも生徒会に入ってもらうよ。」

壱夜先輩は、ソファに腰掛けながら言った。

ちよつ、ちよつと待って…、生徒会って…？

「生徒会って、何の話ですか？」

「俺のルームメイトになる対価、という感じかな。簡単に説明するよ。生徒会について。」

まず、生徒会長・副生徒会長がいて、それを補佐する書記が1人ずつ。それと、会計が2人の計6人。

それで、生徒会長の補佐をする書記を君にやってもらいたいんだ。今年いっぱいね。」

「つまり、僕に生徒会に入って書記をしろと…？」

「まあ、そういう事だね。これからよろしく。あと、その部屋は勝手に使って良いから。」

俺は今から5日後の君らの入学式の挨拶について、校長に話さないといけないから行くけど、此処にある物なら勝手に使って良いよ。でも、俺が使ってる部屋はあまり弄らないでね。」

と言うと、部屋から出て行った。

此処に1人取り残され、どうしろ...と？

あたしは、仕方が無く壹夜先輩に言われた部屋に入った。

そこにはシングルサイズのベット・本棚・机・洋服箆笥があつた。

ご丁寧にクローゼットまでついていた。

とりあえず、持ってきた荷物を洋服箆笥とクローゼットの中に入れた。

3・会計さんは仕事を増やす!?

1人、知らない場所に取り残されたあたしは、荷物を全てしまつと、する事が無くなつてしまつた。

「勝手に弄つて、どうこう言われるのは…嫌…だな。」

と1人でいるのに、返事を求めてしまふ。

何の前ぶれも無く、後ろから誰かに抱きしめられた。

「えっ？」

「はじめましてっ、生徒会会計2年・閨城 千景ですっ。」

後ろから、抱きしめてる状態で初めましても何も無い。

あたしは、驚く事に気がいつて、生徒会会計というところには気が行かなかつた。

「本当に…男の子？女の子みたいだね。」

まあ、確かにあたしの顔を男と見ろ、という方が無理なのだ。

「あの…ええと…」

「あ、ごめんね。」

といい、抱きついてた腕を離した。

ようやく、あたしはその人の顔を見る事ができた。

…まつ毛長いつ。髪綺麗つ。

壱夜先輩に負けなくらい整った顔。

「何？俺の顔になんかついてる？」

「いついえいえ…、何か用ですか？壱夜先輩に。」

あたしに用があるはずが無い。

壱夜先輩に、用事だ。

「壱夜…？ああ、あいつ今校長の所行ってるでしょ。さっき会った。実はさ、壱夜にルームメイトが出来たって聞いたからさ見に来たんだ。」

壱夜、そろそろ帰ってくると思うんだけど。」

会計さんが、話しているとドアが開く音がした。
どうやら、壱夜先輩が帰ってきたらしい。

「千景、お前、また面倒な事をしてくれたな…」

ひきつっている笑顔な壱夜先輩。

何？とニコリと笑っている会計さん。

…この笑顔の意味がわかりません。

「お前が、やった事なんだからお前が全部、片付けろよ。」

「えー、壱夜ひどーい。」

壱夜先輩の笑顔が崩れ、会計さんの顔を睨みつけた。

会計さんの笑顔は、崩れない。

「仕方が無いから、片付けてくるよ。」

会計さんは、ソファから立ち上がり出て行った。

「先輩、あの人何をやったんですか…？」

気になったので、聞いてみた。

更に、また、というのも気になる。

「ああ？後で、千景に直接聞いてみなよ。

…学校でも、周ってくる？一緒に。」

一緒に、というのを壱夜先輩は強調した。

此处で断ったら、どうなるのかと思っても断らない。

「いいですよっ。」

さすが、暇人のあたし。

「じゃあ、行こうか。」

妙に、輝いて見える壱夜先輩の笑顔。

その裏に、何か隠されてると思うと顔がニヤける。

エレベーターの中に入って、1階のボタンを押す。

「櫻木せんぱーいっ。」

背後から、声が聞こえる。

壱夜先輩の事を呼んでいるのだろう。
ぴた、と壱夜先輩の足が止まった。

「守狩…。どうしかした？」

「閨城先輩が、またやりましたよっ。」

「はあ？」

また、というときと同じ事なのかもしれない。

この守狩さんは、知っているのかもしれないが、あたしは先程あ
言われてしまったので、聞く事が出来ない。

「ごめんっ、唯、また後で周るの一緒に行ってやるから今は待つ
て。」

……………千景、自分で片付けろよ。俺の仕事を増やすな……」

4・腐女子さん、黙ってもらえます？

「え……。」

驚いて、あたしは開いた口が閉じられない。

しぶしぶと、エレベーターに乗って部屋に戻ろうとしたが、先程の守狩さんが話しかけてきた。

「君も今年から、1年？」

「えっ、と、ハイ今年から一年ですが。」

「俺も今年から、1年だから。」

あ、壹夜先輩とは、中学が同じだったんだ。あと閨城先輩とも。」

近くにいた女子が、あたしと壹夜先輩の事を喋りだした。

「櫻木先輩とは、どういう関係なのかしら。」

「もしかして櫻木先輩の恋人っ？」

「きゃー櫻木先輩ってホモだったの？」

「じゃあ、どっちが攻めかなっ。」

「それは勿論、櫻木先輩よっ」

お願いだから、黙ってくれその腐女子。
くすくす笑うなら、何か言ってくれ。

「自己紹介が遅れたね。俺は、守狩 久志。1 - 3です。
と言っても、まだ入学式前だから組は関係ないかなー。」

「香月 唯です。僕も同じで1 - 3」

「へえっ、そうなんだ。じゃあ、さ部屋も近いかも知れないね。俺は、2階の102室。君は？」

「えっと…、何号室かわからないんですけど、一応6階です。」

また、腐女子が喋りだした。頼むから、此处から離れてよっ。

「きゃー、じゃあ、やっぱり櫻木先輩が攻めね。」

「当たり前よ、あの子受けて顔してるじゃない。」

「じゃっ、じゃあ僕はこれで…」

この空気にいると、何か言い出しかねない。

守狩さんが正常でいられるのに、尊敬しますよっ。

「6階…って…生徒会じゃなかったっけ。」

「6階って、生徒会だよな…」

守狩さんが、何か疑問そうな顔であたしの事を見ていたのは見てないことにしよう。

あたしは、エレベーターに乗ると6階のボタンを押した。

エレベーターが閉まる直前に

「す、すいませんっ。」

と言ってエレベーターの中に入ってきた。

雰囲気からして、あたしと同じ1年生だろうが多分、彼の目からするとあたしは上級生に見られているらしい。

彼は、エレベーターのボタンを押そうとした時に、驚いたようにあたしの方を見た。

多分、6階だからだろう。

彼は2階で降りた。2階は1年生と2年生で使っている。

エレベーターから降りて、部屋の前に行く。さっき、壱夜先輩から貰ったカードを入れる。

壱夜先輩によると、6階しか鍵が無いらしい。しかも、その鍵はカードだなんて、一体何処のお金を使っているんだか、不明だ。

部屋に戻っても、する事が無い。さっき、会計さんが何をして、今壱夜先輩が何をしているか気になる。

気になるけど、今、二人が何処にいるのかすら分からない。

「暇だな……」

他の1年生達は、多分自己紹介とかで盛り上がってる時だと思う。暇なら外に出て、探検するのも良い……。ただ、そこで迷ったら此処に帰れなくなる。

今、長い針が指している時刻は、17時。

此処に来てから、5時間も経っていた。

17時…、夕飯の時間は18時から21時までの3時間だった気がする。

とりあえず、自室へ行って1時間寝ることによろ。

5 生徒会専用の食堂！？

ガチャ、という音が聞こえたような気がした。
ドアの近くから。多分、ドアが開いたのだろう。
壱夜先輩が、帰ってきたと考えるべきだろうか。

「唯ー。」

あたしを呼んでいる声がする。
目蓋を開け、身体を起こして、ベットの横にある時計を見る。

19：00

長い針が、時刻告げていた。

ヤバ…寝過ごした…。

あたしは、ベットから離れドアに手をかけ、部屋から出た。

「唯、夕飯食べた？」

唯、と呼ばれると感動しそうになる。

誰でも、この声で名前を呼ばれたらそうなるだろう。

「んー、まだ。」

眠気がまだ、覚めてはいなくて、目を擦りながら言う。

先輩に対して、んーとはと後で思ったが、どうしてもよかった。

「じゃあ、今から食べに行くか。」

「わあ」

思わず声が出た。食堂は高級レストラン並に綺麗だった。話によれば、食堂は男女にわかれているらしい。寮は別れて無いのだが、何故か食堂は離れている。

「この時間、混んでるんだよね。」

見渡す限り席は埋まっていた。再び壱夜先輩に手を引つ張られた。すぐ手前にあつた階段を上った。階段の所には貼り紙がついていた。

関係者以外立ち入り禁止

どこからどこまでが関係者かわからない。

まあ、壱夜先輩が通るなら壱夜先輩は関係者ならしい。階段を上って行くとエレベーターがあつた。上に行けるらしい。

食堂は、寮のエントランスの先にあつて食堂の上は無い。という事は上があつたら屋上になる。

エレベーターに入るとボタンは1と2の2つだけ合つた。ちらりと隣にいる壱夜先輩の顔を盗み見をした。

壱夜先輩は会計さんの顔を見るなり、小さくため息をした。小さなカフェテラスのドアを開けて、あたしと壱夜先輩は中に入った。

カウンター席が9席と5人用のテーブル席が2席あった。

「あ、縁。コチラは唯ちゃん。新一年生で生徒会の会長の書記をやってもらうらしい。壱夜によれば。」

会計さんが、勝手にあたしの事を紹介した。縁、という会計さんの隣に座っている人は会計さんと違ってかなり、落ち着いている人だ。縁先輩があたしの事を見た。しかも目も合ってしまったので、挨拶をした。

「…今の会計さんの紹介でわかんと思いますが、香月 唯です。」

皆があたしの事を見て、笑いを堪えようとしている。

あたし…何かした…？

「唯、今何を言ったかわかる？」

壱夜先輩の言葉が理解できずに、考え込む。

「随分と面白い奴が来たな。」

6・もう1人の会計さん

「え…、僕何か言った…？」

真面目にあたしは聞いた。

あたしのその真面目な視線の先に、また必死に視線を堪えている壱夜先輩や縁先輩。

複雑な顔で、じーとあたしの事を千景先輩が見ていた。

「唯チャン、今千景の事なんて言った…？」

くくく、と壱夜先輩がずっと笑いを堪えている。
堪えるなら、何か言って普通に笑ってよ。

「ち…かげ先輩…？…あ…」

会計さん…？あたししたら何言ってるわけっ？
いつも、会計さんとしか思って無いから仕方が無いけど。

「あ…の、ごめんなさいっ。」

頭を下げる。まあ、一応だ。
後でどうか言われても困るし…。

というよりも、思いつきり会計さん…じゃなくて…千景先輩が笑っている。
くすくすと。

「よかった。唯がそんな感じの人だと生徒会明るくなるね。」

へ…？何が、よかったって…？

ちよっと、話がズレてる様な…ズレて無い様な…。

「あ、唯チャン、自己紹介が遅れたね。

俺は、朔捺 縁。一応、千景と同じで生徒会会計。

千景は、喧嘩ばかりしてるから、仕事が全部俺に来る…。」

「ちよっと…、それって酷くない？唯が居る所で…。」

ちよつちよつちよつ、千景先輩が縁先輩の事を上目遣いで見てるよ…。

わー、千景先輩の上目遣い…正面から見たい…。

「本当の事だしさ。

入学式の新入生代表の言葉って唯がやる事になってるらしいね。

まあ、頑張りなよ。」

縁先輩が、あたしに向かって何か言っている。言っている。言っているう？

「ちよ、ちよつと新入生代表の言葉って…？」

ちら、と視線を壱夜先輩の方に持っていく。

壱夜先輩は、今思い出したかのように、あ、と声を上げた。

「ごめんごめん、言ってなかった？」

言うも何も、そんな話は初耳ですがっ。
しかも、あたしが代表で…？無理無理。

「聞いて無いです。」

「あー、壱夜酷いねー。」

会計…もとい、千景先輩が壱夜先輩を睨む。

「酷い、って。でも一応、今日聞いたし唯に会ったのは今日が初めてだしさ…。」

さつき、校長の所言った時に言われた。」

「じゃあ、壱夜が書くべきじゃない…？」

新人生代表の言葉を。それを、唯が読めば。」

千景先輩が、調子に乗っているように見えるのは気のせいですか…？
そ、それよりも千景先輩、先程の問題はどうなったのですか…？

と聞けずにいた自分が悲しいような…。

「はあ、それも俺がやるの？まあ、いいけど。
今からやらなきゃな…、あーマジで面倒。」

壱夜先輩は立ち上がり、机の上に元々あった白紙を一枚手に取る。

「縁、何書けばいいの？縁、1年の時やったよな？」

「ああ、確か、やった記憶が。」

「どんな事、言った？」

壱夜先輩が縁先輩の目を真剣に見てる。

勿論、壱夜先輩の右手にはシャーペンが握られている。

「はあ、自分でやるって言ったからには、自分でやりなよ。」

7・起きないと…

「あ、唯。何か食べる？」

縁先輩と話していた壱夜先輩が、あたしに話しかけてきた。
1人虚しくぼーとしていたせい…だと思うけど。

あたし達は、テーブル席に座っていた。

あたしの隣に、壱夜先輩。前に千景先輩。そして斜めに縁先輩がいた。

「あ…うーん…、軽いものが食べたい。」

そういえば…、此处に来てから何も食べてない気がするのは気のせいだろうか…。

壱夜先輩が、カウンターのにいる人に話しかけ、軽いものと言った。

「じゃあ、これも言った方がいいよな。」

「それは、お決まりの台詞でしょ。」

「まあ、そういうのもないかね。」

壱夜先輩が、あたしの代表の言葉を書いてくれている…が、あたしはこの人に今は感謝しない方がいい。

あとで何が起きるか…理解できてからにした方がいいような気がする。

る。

千景先輩が夕飯をほお張りながら、壱夜先輩と会話する。お決まりの言葉は言った方がいいよう…。

そして、縁先輩も軽く何か食べる、というよりもつまんでいる。食べてないのは、壱夜先輩だけ…。

いつ、食べたのこの人は…？

そんな事を思っている、前に出された料理を目の前にして言うつもりは無い。

今日は色々あった、という事で夕飯が食べ終わってから、視界がうとうとし始めた。

その様子に、壱夜先輩が気付き

「寝たいなら、寝て良いよ。」

…寝ます。寝ます。寝ます。

まあ、此処で寝ても壱夜先輩の性格からすると帰る時には起こしてくれそうだし。大丈夫…だよね。

あれから、どれくらい時間が経ったのか寝ているあたしにはわからなかった。

「千景も寝たのか…。縁、今何時？」

壱夜先輩が縁先輩に時刻を聞いている。

この様子からすると、縁先輩は壱夜先輩にずっと付き合っていたの

だろう、と思える。

まあ、内容はあたしがやる代表の…なんだけど。

「今は１１時。俺も早く寝たいんだよね。」

ちらりと、視線だけを左手についでいる腕時計にもっていく。
針は１１時を告げていたらしい。

このカフェテラスらしき所に来てから、４時間経っていた。

「もうそんな時間…？で、この２人どうする？」

壱夜先輩が寝ているあたしと千景先輩を指差して言う。

「此处、結構寒いからね。連れていった方がいいのだけど…千景は運べるか。」

千景先輩の事はどうでもいいように、吐き捨てる縁先輩。
でも、無理はない。千景先輩は身長が１８１ｃｍあるのだから。
それに比べて、壱夜先輩は１７８ｃｍ、縁先輩は１７４ｃｍあるらしい。

話によれば。

ちなみに、あたしは大きくも小さくもない１６２ｃｍ。
どうして、３人はこんなに背が高いのか。

憧れやしないけど。

「ちーかげ、起きろ。そんな所で寝てると風邪ひくぞ。」

壱夜先輩が千景先輩の耳元で、手を叩いたりして起こそうとする。
千景先輩がその音に気付いたのか、ん、とだけ声を上げた。
が、起きる気配は一向に無い。

「縁、起きないんだけど…」

「ちょっと、壱夜。耳貸して」

ん、とだけ壱夜先輩は返事をする。縁先輩の方に近付いてった。
そして、耳元で縁先輩は壱夜先輩に何か小声で言っていた。

壱夜先輩は、ニヤリと顔を変えると縁先輩から離れ、千景先輩に近付いた。

すやすやと眠る千景先輩の耳に壱夜先輩は

「千景、起きないとキスするよ。」

それが聞こえたのか、気配で感じとったかは千景先輩本人しかわからないがビクツと肩を上げ、起きた。

「壱夜っ、なんか言っただっ？」

「いいや、何にも。な、縁」

「千景、怖い夢でも見たのか…？」

あんな事を言っただけで正常でいられる先輩達が凄い…。

「唯、起きろ。」

と老夜先輩にあたしは頬をぺちぺち軽く叩かれる。

「今…何時？」

ソファにもたれかかっていた身体を起こし時計を探した。

「今は11時12分13秒。」

即答された。縁先輩に。

あたしは眠い目を擦り、足を床につけようとしたその時、突然カフエテラスの扉が開いた。

「まだ、居たんだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8359b/>

*Non-daily life

2010年10月28日03時38分発行